

The Browning Version に見る教師の転換点

中村愛人

(1991年9月30日受理)

The Turning Points in the Career of a Schoolmaster as Seen in *The Browning Version*

Yoshito Nakamura

The Browning Version is a one-actor and one of the masterpieces of Terence Rattigan, where the tragic figure of a schoolmaster Andrew Crocker-Harris is convincingly presented. Tragic because his life as a schoolmaster is an utter failure in spite of his early hope and enthusiasm, and his efforts. He is also tragic as a husband with all his good intentions. Hence the aim of this essay, that is, to discuss how and why he fails as a schoolmaster though he started his career as a schoolmaster with hope and enthusiasm, and made effort in his own way. It is also our aim here to examine whether it has anything to do with his unsuccessful marriage.

A comparison is made, when necessary, between Andrew Crocker-Harris and Chips in *Good-bye, Mr. Chips* by James Hilton to help forward our discussion.

I. はじめに

本論では、Terence Rattigan (1911-1977) の戯曲 *The Browning Version* (1948) を取り上げる。

ラティガンは、鋭い劇場感覚 (sense of theater) に裏打ちされた、緻密な作品の構成、人間性に対する深い洞察、適確な性格描写、機知に富んだ軽妙な台詞等によって、今日、イギリス風習喜劇 (comedy of manners) の伝統を継ぐ第一級の劇作家として評価されている。

彼の作品は、幅広い大衆の人気や興行的成功の故もあって、well-made play を書く器用な作家ではあるが、George Bernard Shaw (1856-1950) に見られるような「思想」がないと批評されることもある。しかし、彼にとっては、劇は「思想」を直接表明すべき場所ではなく、それは、ある劇的状況とそこに登場する人物との組み合わせと働きかけの中に、更に、作品全体を通して表現されるものであって、そのようにして彼は「人間探究のドラマ」を、次々に生み出した。そして彼の作品では、どこにでもあるような恋愛事件や人情話を通して、人間と人間の係わり合いとそれぞれの存在が、見事に描き出され、我々に確かな手応えをもつ

て何かを感じさせるものとなっている。

The Browning Version は、タイトルで示されているように、ギリシア悲劇アイスキュロスの「アガメノン」を骨組みの下敷きとして利用し、また、その「ブラウニング訳」が、作中で小道具として使われて効果をあげている点でも興味深い戯曲であるが、以下の本論においては、芸術作品としての論議はさておいて、「人間探究のドラマ」ということに焦点をしぼり、主人公の古典語教師の、希望と情熱にあふれていた教職に就いた当時の姿と、作品の現在、つまり退職を前にしての教師として完全な失敗者になり果てた姿の落差に注目し、その変化の要因を探ってみたい。

余り批評文献等の参考資料がない作家であり、論は主に作品そのものを手掛かりに進めるものとする。その際にこの作品の批評において、一言二言程度言及されはするが、特に詳しく取り上げられることのなかった James Hilton (1900-1954) の *Good-bye, Mr. Chips* (1934) との比較を取り入れたい。

II.

場所は、イングランド南部にあるパブリックスクー

ルの教師の住むアパートの居間。時は、7月の終業式の前日の夕方の数時間。これが、この作品の舞台である。話の展開も単一で、まとまりも良く、言わば、three unities を守った古典的な構成の劇と言える。主人公の教師は、アンドルー(Andrew Crocker-Harris)。すぐれた古典学者でありながら、教職と家庭生活に失敗し、心臓病のため定年前に退職し、受験塾の教師に転職しようとしている人物。この数時間の間に、彼について、直接本人の言動によって示され、また他の人物の話によって間接的に語られて、彼の過去と現在が明らかにされて行く。

まず、補講を受けに来た生徒のタブロー (John Taplow) と、たまたま居合わせた若手理科教師のフランク (Frank Hunter) の会話によって、生徒から見たアンドルーの現在の教師ぶりが、語られる。次いで、フランクとアンドルーの妻ミリー (Millie Crocker-Harris) の会話から、アンドルーという人物について知らされ、その後、アンドルー本人が登場して、それまでの他の人物の話を書き付ける。その後は、タブローとの補講で、彼の教え方や過去の情熱の一端が示され、校長のフロビシャー (Dr. Frobisher) とのやり取りでも、彼の生活状況や学校での立場などが伝えられ、また、アンドルー自身の対応ぶりからも、彼の人物像が明確にされて行く。そして彼の後任の若いギルバート (Peter Gilbert) の訪問をきっかけに、彼の口から、現在までの教師としての経緯が、詳しく説明される。最後にアンドルーは、妻の愛人であるフランクに、彼の結婚生活の失敗について話して聞かせる。

アンドルーの人物について教えてくれる主な場面だけを取り上げても、このように次々と設定されていて、作品が、主人公のアンドルーを中心とし、その人生をテーマとして展開していることが、納得できるであろう。また、本人のアンドルーが、正直で誇張のない言動で特徴づけられているのと同様に、他の人物達の話しも、その人物なりの立場からという色合いを帯びてはいるものの、これまた率直で、潤色のない、偽りのない話となっていて、着実にアンドルーの人物像は、伝えられることになっている。作品は、この本人の言動と、他の人物達の話を書き組み合わせることによって、常に中心人物アンドルーに照明を当てながら、その肉付けを、見事に達成している。

ここでは、アンドルーの教師像を中心に、彼が教師として、どういう過程を経て、現在に至ったかを、整理してみることにする。それは、また、アンドルーも、かつては、あのようであったかと思わせる新任のギルバートとの対比、アンドルーとの違いを際立たせる中堅の人気教師フランクとの対比、そして現在のアンド

ルーの提示という組み合わせによっても、彼の教師としての失敗の道程は示されている。

まずアンドルーの教師第1期は、教職に就いて初めの頃、教師としてまずまずの滑り出しを見せた時期。第2期は、人に好かれないう性格を、何とか笑いで補って成功をおさめていた時期であり、そして第3期は、「五年下級のヒムラー(the Himmler of the lower fifth)」⁽¹⁾と称される、教師として完全な失敗者となった現在であろう。

第1期では、彼は、新任のギルバートと同様、まだ夢と情熱を持っていたことであろう。妻のミリーも、そのことについては、認めている。(13)しかし、彼は、生徒の人気を得るために、安易に「笑い」を利用してしまった。もっとも、教師として、徐々に経験を積み、こつも心得て、それはそれなりに効果をあげていた。これが、第2期で、人気教師フランクも、性格的にも生徒への対し方も対照的ではあるが、現在この時期にあたっていると考えられる。しかし彼は、その後、いつしか生徒の笑いを利用することが出来なくなり、厳格なだけで、恐れられる対象としての教師になり下がって行く。

このように見て来ると、第2期までのアンドルーと第3期の彼とは、いささか別人の観がありはしないだろうか。ミリーやフランク等まわりの者や自分でも認めているような教師ではなかった。性格的に見て、学者としては一流になり得ても、教師にふさわしいとは言えない。フランクの言うように、学校の教師にかなるべきではなかった人物かも知れない。しかし、第3期までの彼なら、全くの失敗だったとは、言い切れない。もしそうなら、ミリーの言うように、教師を天職と考え、将来の夢を語るなど言うことは、もともとあるはずもなかったであろう。当初は、情熱もあり、努力をしていたことも事実で、そのまま行けば、円熟し、そこそこの教師としてつとまっていたと考えられるのだ。つまり、彼の性格も、致命的だったとは言えない。では、なぜ、あの第3期のような状態にまで落ちてしまったのであろうか。どこかで彼は、方向を間違ったのではないだろうか。

ここで、その手掛かりを得るために、他の作品の他の人物と比較検討をしてみたい。この作品の一つの読み方として、主人公のアンドルーを、James Hiltonの*Good-bye, Mr. Chips*の主人公チップス (Chipping, 愛称 Chips) と重ね合わせて読む、あるいは、比べながら読むということが考えられる。よく照合したなら、ずいぶん違う二人であるのに、どこかしら、お互いを連想させるものがある。そもそも、どこでこの二人が連想づけられるかと言うと、まず共にパブリックスクー

ルの古典語教師であり、しかも退職時の状況が注目されるからであろうか。そのことが、全く不都合でないのは、作品の中でも、一度だが、チップスへの言及がされている。ミリーが、新任の前途有望なギルバートについて、年金が貰えないと決まったアンドルーに当てつけて言う。

Still I bet when he leaves this place it won't be without a pension. It'll be roses, roses all the way, and tears and cheers and goodbye, Mr. Chips. (34)

つまり、作品は、幾分かは、何らかの形でこの *Good-bye, Mr. Chips* が、下敷きになっている、あるいは、意識されていると言えるのではないだろうか。

二人の共通点、相違点をあげると、共にパブリックスクールの古典語教師であることは、既に指摘した。しかし、学者としては、アンドルーの方がはるかに優秀で、オックスフォードでは、数々の荣誉ある賞を受けて、教師となっている。新任の頃は、二人とも情熱と夢を持っていた。アンドルーについては、上で述べたが、チップスも同様で、校長になることが、夢であり目標であった。では、彼らは、どのような教師であったか。この点では、チップスは最優秀の教師でこそなかったが、どの点から言ってもアンドルーよりは上であろう。しばらく勤めた後、教師としてマンネリに陥りかけていたのは、二人に共通であるが、チップスの場合は、結婚を契機として、「新しい人間」⁽²⁾に変わって成功した。

チップスの特徴として、ユーモアのセンスがあるが、1例をあげよう。

Whenever his Roman History forms came to deal with the Lex Canuleia, the law that permitted patricians to marry plebeians, Chips used to add: "So that, you see, if Miss Plebs wanted Mr. Patrician to marry her, and he said he couldn't, she probably replied: 'Oh, yes, you can, you liar!'" Roars of laughter.⁽³⁾

古典語の教師というものは、いや教師というものは、と言うべきかも知れないが、こういう洒落をよく使うらしい。アンドルーも例外ではない。しかし、タプローが説明した、授業中と言ってクラスの誰もわからなかったものとか、退職のスピーチのために彼が用意したものを比べれば、優劣は、自ずと明らかであろう。結婚を契機に、この笑いの才能に磨きかけたチップスと、逆に、いつしか笑いから遠ざかってしまったアンドルーの対照は、印象的である。

結婚のいきさつは、両者とも不思議と良く似ている。チップスが、妻となるキャサリン(Katherine Bridges

愛称 Kathie)に出会ったのは、休暇中に出かけた湖畔地方への旅行中の登山で、彼らは、結婚後の生活を暗示するかのように、そそっかしいチップスが、活動的なキャサリンに助けられている。アンドルーの場合は、やはり休暇中に湖畔地方を徒歩旅行していて、丁度ミリーが泊まっていた彼女の叔父の邸宅に、水を貰いに行行って出会ったとか。これまた、どこか、彼らの結婚後の関係を暗示しているようにも思える。ただ、両者の結婚後の生活は、大きく違っている。キャサリンとの結婚によって、生き返ったかのように活躍するチップスであったが、その結婚生活は、お産の失敗で、妻も赤ん坊も死亡するという不幸によって、ほんの2年足らずのうちに終っている。アンドルーの方は、彼の退職を前にした現在まで、曲りなりにも20年間続いている。

ここで、教師としての成功の程度という観点から、アンドルーとチップスの比較を図式的に整理すると、まずアンドルーの場合は、第1期から、そこそこの程度でゆるやかに上昇する。第2期にはいり、笑いを手段として上昇の度合いを増すが、いつしか下降に転じ、どん底に達したまま第3期に至り、退職を迎える。チップスは、初めはアンドルーより上の程度で、やはりゆるやかに上昇線を描き、結婚前では、それが、マンネリのため現状維持か、やや下降気味の状態になっていた。結婚後、大きく上昇に転じて、妻の死後、一時やや下降するが、そのまま高い位置で現状維持を保って退職する。

ここで問題となるのは、アンドルーの「いつしか下降に転じ」というその時点と原因であろう。そこで、わからないのが、チップスの場合と違って、アンドルーの結婚が、いつだったかということである。結婚生活が20年だということは、言われている。また、フロビシャーは、18年一緒にいたと言う。これは、アンドルーが、勤め始めてからの年月なのか、フロビシャーが、後でこの学校に赴任して来て、アンドルーと一緒に勤めた年月なのか、それとも、既に他の学校で教師をしていたアンドルーが、フロビシャーのいるこの学校に勤め始めてからの年月なのか、それとも、まだ別の事情があるのか、残念ながらわからない。いずれにしても、アンドルーの結婚は、教職に就く少し前か、就いてからなら、割と早い時期だと考えられる。

それにしても、彼の場合、結婚による影響が、言及されていないのは、どうしてなのか。チップスのように目覚ましいほどの結果を及ぼしていないとは言え、何らかの影響があつてしかるべきなのではないだろうか。もちろん、その後の結婚生活については、かなり説明されているが、結婚当初のことが、これまた不明

となっている。「いつしか下降に転じ」と言うのは、実は、この結婚の影響が始めてからということではないだろうか。正確な時は、不明であるが、結婚生活が、破綻をきたしてから、それが悪影響として、教師としての彼の存在を、徐々に触み始めた時、それが、この「いつしか」だと考えられるのでは、ないだろうか。

それでは、アンドルーの結婚は、いかなるものであったのか。アンドルーには、自らの過去を他の人物に語る場面が、3度ある。作品にとって、それぞれ重要な場面であるが、補講の途中で、タブローに、若い日の古典文学への情熱について語り、新任のギルバートには、教師としての経験を話す。最後に、妻の愛人であるフランクには、ミリーとの結婚の失敗について説明する。その最後の場面で、ミリーと別れるようにと忠告するフランクに対して、アンドルーは、自分達の結婚生活について、冷静な分析の結果を話す。

Both of us needing from the other something that would make life supportable for us, and neither of us able to give it. Two kinds of love. Hers and mine.

Worlds apart, as I know now, though when I married her I didn't think they were incompatible. In those days I hadn't thought that her kind of love—the love she requires and which I was unable to give her—was so important that its absence would drive out the other kind of love—the kind of love that I require and which I thought, in my folly, was by far the greater part of love. (44-55)

二人の愛は、別種の愛 (two kinds of love) であって、どうしようもなかった。そして愛情であるべきものが、憎しみに変わってしまったのだと続ける。

この別種の愛とは、具体的には、どのようなものであるのか、ほとんど説明されていない。アンドルーとミリーのそれぞれの性格、ミリーの言葉「あの人は、まるで男ではないわ」(40)、アンドルーの言う「不満な女房とその尻にしかれた亭主」(45)などのことから、大体推測されるのは、アンドルーの理性的な愛情と、ミリーの肉体的な欲求が相容れなかったのであろう。同じ問題は、後の傑作 *The Deep Blue Sea* (1952) にも作品のテーマとして取り上げられているが、やはり明確な説明はされていない。これについて、次ぎのように断定した批評も見受けられる。

He (Andrew) has been unable to satisfy the sexual needs of his wife, Millie, who with calculated destructiveness has turned to other men.⁽⁴⁾

満たされないミリーは、夫アンドルーに対して攻撃的になり、残酷と思われることも平気で口にする。彼女は、欲求不満を、アンドルーを責め苛むことで、解消しようとする。それにとどまらず、何人もの男と不義を働き、その最後の男がフランクであるが、おまけにその事実を、アンドルーに告げ、更に相手を苦しめることで、自らの心の平衡を保っているかのように見える。

しかし、アンドルーは、それでもミリーと別れなかった。彼は、フランクに説明する。別れることで、結婚したという罪に、また罪を重ねたくない。ミリーも自分と同様の気の毒な人なんだから(44)。アンドルーは、なんでもないことのように言うが、こういう認識のみで、平然としておれる人間がいるだろうか。その答えが、アンドルーのそれ以後の変化だということになるであろう。なるほど彼は、自分の結婚生活を、一見冷静に分析し、それによって、済んだこと、どうしようもないことと見なして、現状に甘んじた。だが、以後の彼の変化を考えるなら、そのためには、多大な犠牲が払われなければならなかったということがわかる。

もう一度、チップスとの比較に戻ってみよう。彼の結婚による変化の一つとして、「厳格でなくなった」⁽⁵⁾とある。彼は、ブルックフィールド校に勤務する時、校長から、厳格な態度を取るように助言された。そして、その通り実行して、上々の滑り出しを見せたのだった。それが、結婚後円熟味が増し、寛大さが出て来ることによって、かえって生徒に受けが良くなったと言う。このチップスの場合と比較して、アンドルーは、第2期以後、どんどん厳格さを増し、「5年下級のヒムラー」と言われる程になる。全く逆の変化であるが、一体、何がそうさせたのであろうか。

寛大さというのは、相手(の事情)を理解し、共感する心の働きから生じるものではないだろうか。生徒の過ちに対して、その生徒本人を、その日常からしてよく知っており、何故そうだったかの事情を理解できたなら、唯闇雲に厳格な処置など取れないであろう。つまりアンドルーは、この理解し、共感するという心の働きに欠けていたと考えられる。彼は、ミリーとの結婚生活を、現状維持のまま続けていくために、感情を押し殺さなければならなかったはずである。そのためには、ミリーに対してだけでなく、生活の全般にわたって、更に、あらゆる感情というものを、凡て押し殺す、つまり「抑圧」する必要があった。それが、一面では、彼の厳格さとなって現れ、また、笑いというものから遠ざかることにもなっている。それが、タブローの抗議のように、唯字句を置き換えるだけの無味乾燥な古典文学の解釈にもなってくる。古典文学に対

する感動を、生徒に何とか伝えようとする、若い日の情熱など、望むべくもなかったと言えよう。そして、感情を失えば、これまたタブローの言うように、人間性さえなくなってしまう。サディスト教師だったら、それ程こわくない、という彼の表現は、実に痛切にして適切であろう。感情を持たない非人間的な教師、これは、どう考えてみようと、教師として失格と言わざるを得ない。

ミリーが、言う。「あの人は死んでいる」(40)感情を抑圧することは、不都合な状況に甘んじるためのアンドルーの自己防衛の手段であったと考えられるが、そうして、何に対しても、ミリーの残酷な仕打ちにも、まともに反応し、動揺しようとしないう彼に対して、彼女は苛立ちを覚えていたのであろう。その思いが、「アンドルーは死んでいる」と言わしめたと考えられる。真剣に忠告を続けるフランクに対して、アンドルー自身も、同様のことを言っ、言わば死んだも同然の存在だということを認めている。

アンドルーは、また、次ぎのようなことも言っている。

Nothing is ever too horrible to think of,
Hunter. It is simply a question of facing facts.
(43)

しかし、彼は、本当に「事実と直面」していたのだろうか。ミリーとの結婚生活にしても、ただ冷静に分析し、感情を抑圧して、自分を守りつつ、それに甘んじていただけではないのか。そうすることによって、かえって、お互いの不幸を拡大してしまったのではないか。「5年下級のヒムラー」という校長の言葉の伝える事実でさえ、聞かされて初めて、ショックを受けている。彼は、「私は何事にも耐えられる」(44)とも言う。しかし、それは、感情の抑圧という犠牲を払って出来ることであって、その代償は余りにも大きい。次の指摘は、まことに適切で、*The Browning Version*にもそのまま当てはまるものと言えよう。

This is the message of many of Rattigan's mature plays: human beings cannot live unless they come to terms with themselves and their circumstances, no matter how painful that truth may be. Without self-knowledge there is no hope. However comforting self-delusion may be, it leads finally, like an addictive drug, to death. Rattigan sees men as ultimately the masters of their own fate, and says uncompromisingly that they may not opt out but must confront their lives for themselves.⁽⁶⁾

アンドルーの教師としての失敗は、彼の結婚生活の

失敗に起因していた。だがその前に、彼の性格が、学者としては一流になり得ても、教師には不向きであったということが、前提としてあげられる。そして、この結婚の失敗も、必ずしも不可抗力というのではなく、感情を抑圧して切り抜けようとして、真の意味で事実と直面しようとしなかった彼の偽善性に問題があったと言わねばならない。

また、更にそれを助長したものとして、生徒の存在がある。フロビシャールの表現を借りるなら

“the soul-destroying lower fifth (22)” の存在である。後任のギルバートが、殊更心配していることからわかるように、生徒とうまく相手をして行くのは、実は大変なことなのであろう。もとより、生徒の扱いのうまいはずのないアンドルーにしてみれば、その労苦は、想像に難くない。自分では、否定しているが、これまた、彼の感情の殻を閉じさせた一要因と考えられる。

感情を抑圧し、人間性を失った教師。アンドルーは自らを説明して、「心の病氣」(32)だと言う。しかし、彼は、それが、結婚生活の失敗に対する彼の対処の仕方起因するとは気付いていない。それ故、その解決も、自ら出来るはずもない。

長年の間、殻に閉じこもっていた彼に対して、いくつかの出来事が、揺さぶりをかける。まずタブロー。補講で、「アガメムノン」の無味乾燥な逐語訳を要求するアンドルーに、彼は大胆にも反駁する。更に、「アガメムノン」は、最も優れた戯曲だと主張するアンドルーに対し、クラスの何人がそう思っているか、と批判する。この言葉によってアンドルーは、自分の古典語教師としての失敗を痛感すると共に、まだ情熱を失っていなかった、感情を抑圧する以前の若い日々を思い起こすことになる。若い頃に試みた「アガメムノン」の翻訳を、他の多くのものと一緒に失ってしまったと、嘆くかのようにつぶやくアンドルーであるが、感情を持たない人間には、あり得ないことに思われる。

2番目の出来事は、ギルバートの来訪であろう。ギルバートは、校長のフロビシャールの言葉を、何の悪意もなく、ただそのまま伝えただけであるが、「5年下級のヒムラー」の表現の示す事実を、教師として、完全な失敗者の烙印を押すものであり、アンドルーを愕然とさせるに十分なものであって、彼に、続いて、自らの失敗の歴史を、ギルバートに、自嘲気味に語らせることになる。しかも、どんな事実にも直面し、耐えられるはずの彼が、ギルバートとの別れ際に、先程の打明け話を内緒にしてくれと頼んでいる。おかしな話であるが、これも彼の感情が、揺さぶられ、刺激された結果なのであろう。

その後の出来事は、タブローが、別れの挨拶をしに戻って来て、ブラウニング訳の「アガメムノン」を、アンドルーへの献辞を添えて贈る。彼は、感激のあまり、その感情を隠すことも出来ないまま、その事をフランクに話し、共感を得る。しかし、その直後、ミリーは、タブローが機嫌取りにやったことだと暴露して一事実は、そうではないのだが—アンドルーの感激を打ち壊してしまう。この場面は、作品の見事なクライマックスを作り上げて、次の解明部への展開の原動力となっている。

夫のアンドルーを傷付けて、いささかも痛みを感じないミリー、ただフランクとの関係を続けようとするだけのミリーに対して、フランクは、はっきりと別れを決意し、それを告げる。また、アンドルーに同情し、何とか力になろうとして、ミリーと別れるようにと真剣に忠告を繰返す。それでは、アンドルーの方は、どうであろうか。思わず涙を流すほどの感激と、それに冷水を浴びせかけられたショックは、余りにも大きい。しかし、一度よみがえった感情の流れは、もう止められるものではなかった。タブローの贈り物に、うかつにも感激した自分を悔む言葉にも、フランクの説明と忠告に受け答える彼の激した、皮肉っぱい言葉の端々にも、感情があふれている。

アンドルーの変化は、その後の彼の言動のうちに、大体見ることが出来そうである。まず、フランクに、タブローが進級出来たこと、それを本人に伝えてもよいと話す。それまでの厳格な、規則一辺倒の彼からは、考えられないことと言えよう。校長のフロビシャーには、受賞式では、anti-climaxになろうとも、同じく退職するフレッチャー(Fletcher)の後にスピーチをすると告げる。最後のミリーとの話も、フランクの忠告をそのまま実行に移すものとなっている。このまま進めば、おそらく、二人は、少なくとも事実上は、別れることになるに違いない。この彼の変化は、「何事にも耐えられる」と言っていた彼からは、考えられないことであり、彼が、生きた人間として胎動を始めかけている表われであろう。

アンドルーの感情の抑圧の結果は、かくのごときものであったが、生徒のタブローの精一杯の抗議にあい、自らの若い頃を呼び起こすかのような新任のギルバートに「5年下級のヒムラー」という現在の自分の姿をつきつけられ、また、タブローからは、感動的な贈り物を受ける。更にミリーの残酷なまでの仕打ち、しかし、フランクの真剣なとりなしと忠告という段階を経て、彼の感情は、再び息づき始める。精神的な復活の兆しが現われると言ってもよい。それは、フランクの忠告に、結局は従う言動を示すと共に、校長の申し出

を拒否するという主体的な行動に見られる。

しかし、かと言って、元凶とも言える結婚生活の解消が、保証されているわけではない。また過去数十年にわたる失敗の人生が、やり直せるわけでもない。余りに遅きに失したアンドルーの人間性の復活と言えようが、だが、それだからこそ、人は、人生の現実に直面しなければいけない。現状維持をはかって、徒らに感情を抑圧し、自分を殺すことは、とりも直さず、以後の貴重な人生を、自分のみならず、関係する周囲の者の人生をも狂わしてしまう。この主張は、強烈に訴えるものを持つ。

付言すると、アンドルーとミリー夫婦の間に介在するフランクの存在は興味深い。ミリーの誘いで愛情のないまま不義の関係を持ち、アンドルーにとっては許しがたいはずの人間でありながら、後には、彼に同情し、ミリーと別れるように忠告し、実際に彼の精神的再生の力になっている。また、別の見方をすれば、彼自身もアンドルーとは対照的ながら、生徒の人気取りをするという偽善者、ミリーとの不義という偽善性に毒されていたが、後に、ミリーの残酷さに触れ、アンドルーに同情し、誠意をもって彼の手助けをしようとする、言わば、人間性の復活を遂げている。以後彼は、どのような教師ぶりを見せることになるであろうか。

生徒が、教師に求めるものは、若手の教師に対してと、年配の教師に対してとは、かなり違うのではないだろうか。前者には、身近な仲間のような存在、共感者の役割を、後者には、文字通り、教え導いてくれる役割を期待するのではないか。一人の教師について言い換えるなら、年令と教師歴の進行と共に、自らも成長を遂げて、役割の移行をする必要がある。アンドルーには、それが出来なかった。丁度その時期に、結婚生活の破綻に伴う精神の荒廃をきたしてしまっただ教師では、成長するはずもなく、生徒の期待の変化に応じることが出来ない道理である。

III. おわりに

たかが虚構という見方もある。文学作品に展開される作りものの人生とそこに描き出された人物を検討することに、どれ程の意味があらうか。しかし、深い読みを通して、本物のリアリティが、そこに感じとれる時、現実の人生と同様の、いやそれ以上の、凝縮された真実が、そこにあると考えるのも間違いではない。この作品には、一人の作家がとらえた、その真実が、示されている。

注

- 1) Terence Rattigan, *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.2, (Hamish Hamilton, London, 1961), p.30. 以後作品からの引用は、凡てこの版を使用。引用文の後に頁数で示す。また引用なしで作品中の箇所を指示する場合も同様。
- 2) James Hilton, *Good-bye, Mr. Chips*, (Hodder and Stoughton, 1965), p.39.
- 3) James Hilton, p.41.
- 4) Michael Darlow & Gillian Hodson, *Terence Rattigan: The Man and His Work*, (Quartet Books, London, 1979), p.155.
- 5) James Hilton, p.40.
- 6) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.160.